孤独の音

natsu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
孤独の音

【Ｎコード】
Ｎ１０６２Ｃ

【作者名】
ｎａｔｓｕ

【あらすじ】
物心ついたときから孤児院に預けられた僕。夜になるといつも、誰かが叫んでいるのが聞こえるんだ。

「やめてくれ。もうやめてくれ。」

つい1分くらい前から、恐ろしいほど甲高く、悲しみと恐怖が入り乱れた子供の悲鳴が聞こえる。

まるで、誰かを呼んでいるような、助けを求めているような声だ。

さっきまで僕はベッドの中で静かに本を読んでいたはずなのに、いつの間にか夜空よりも深い暗闇と、つんざく悲鳴の中に放り出されてしまったようだ。

「やめてくれ。誰が叫んでいるんだ。もう聞きたくないんだ。」

僕は必死に耳を塞ぎ、声から逃れようとした。

しかしその声は聞こえなくなるどころか、頭の中で反響し、大きな渦のように僕を襲ってくる。

僕は耳を塞ぐ両手の力をよりいっそう強くする。

「やめてくれ。聞きたくないよ。ここはどこなの??なんで真っ暗

なの??誰が泣いてるの??」

どこまでも追ってくる悲鳴をふりほどくように、僕は首を激しく振った。

ずっと首を振っていると、一瞬視界に光がさすところがあった。

僕は、首を振るのをやめ、その光を探した。

そして僕はぼやーっとした黄色い光を見つけた。

そのとき僕はやっと気付いた。

「僕は目をつぶっていたのか。」

僕はすぐに目を開けた。真っ暗な世界から解放され、月の光が窓からさしている。

僕はしばらく悲鳴のことも忘れ、ベッドの上で月を眺めていた。

誰がどんなに悲しい思いをしても、決して表情を変えない月。

僕がこんなにも苦しんでいるのに、ただ僕を見下ろしているだけ。
僕の両親のように、僕の苦痛を遠くから見て見ぬふりをしてるんだ。

またあの悲鳴が頭の中に流れこんで来た。

「もうやめろよ。痛いよ。頭が痛いよ。」

月から目を離し、ふと視線を落とすと、窓に泣きながら必死に耳を塞ぐ少年を見た。

そのとき僕は、叫んでいるのは僕だと気付いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1062c/

孤独の音

2010年10月15日22時04分発行